

路上生活者の個人史

第4回(番外編)

竹中尚文

依然としてコロナ禍のためにホームレスの人たちにインタビューをできない状態が続いている。だから、今回も個人史の掲載はできない。代わりに、対人援助と宗教の関係についての考察を試みたい。これは11月25日(木)に「対人援助学マガジン トークライブ」のご縁で話した内容と重複するものである。

I. 共感

お寺の活動として大阪の扇町公園でホームレス支援をしている話は、前回に書いた。今回は、なぜお寺がホームレス支援なのかという話をしたい。

一般に宗教者のホームレス支援というのは、善行を積み重ねて死後に天国に迎え入れられるとか、善行を積むことが修行であるように受け取られることが多い。私がホームレス支援をしてみると言っても、ほとんど何もせずに声を掛けているだけである。その程度の善行が私の煩惱の埋め合わせになるわけがない。私の行為に関しての善悪の収支は完全に赤字である。

善行ではないので、私のホームレス支援の動機は「共感」である。寒空の下、屋外で寝るのは寒いだろうなと思う。美味しいモノを食べたいだろうなと思う。夏の暑い日に冷房の効いた部屋で眠りたいだろうなと思う。こうしたことが、「共感」である。

ところが、「ホームレスは好きでやっている」とか「ホームレスは働きたくない人たちだ」という人がいる。これは自分が関わりたくないと言っているのに等しく、ホームレスは自分とは関係のない人だ、と言いたいのだろう。これは、分断の意識だろうか。

分断の意識は、現代社会のいろんなところに表れる。今、地域社会への不参加を表明する人も多い。あちこ

ちの自治会で担い手不足に悩んでいる。地域の子供会がなくなり、婦人会もなくなった。青年団があったのはどのくらい昔のことだろうか。若い人たちから、出会いの機会がないと言う声を耳にする。今、コロナ禍の中でますます人との分断は進みそうだ。

このようなことはお葬式にも見られる。近年は「葬儀は家族、近親者のみによっておこないました」という話をよく聞く。かつては、結婚式は招待がなければ出席できないが、葬式は招待がなくても行くものだ、という言葉があった。お葬式に行ったとしても、「香典は辞退します」という札に出くわす。

私の記憶の限りのことであるが、かつて、お葬式には誰もが香典を持って行った。集まった香典で、葬儀屋さんに支払い、坊さんにお布施を包んだものだ。そして、余ったお金で、お寺の仏具を寄付したり、地域の集会場の備品を買ったりしていた。ウチのお寺にも昔の寄付の仏具がある。お葬式を出すお家は、お金の心配をする必要がなかった。香典をどのように使うかは地域の中から役を選ん

で、その人が運営した。お葬式を取り仕切る人は、みんなで賢く選んだ者だった。だから、葬儀を出す家族は経済的な心配をすることなく、悲しんでいればよかった。葬儀屋さんが葬儀会社になった頃から、香典を受け取ると香典返しが必要だといって、葬儀社が香典返しの品を準備するようになった。会場も葬儀社の社屋を使うようになり、葬儀費用が香典でまかなえなくなった。それならば、香典を受け取らず、小規模なお葬式にして、葬儀費用を抑えた。そうして葬儀費用は、喪主が支払うようになった。経済的に苦しい生活をしている人は、お葬式に困るようになった。私は葬儀社に煙たがられながら、葬儀費用の仲介をすることもある。みんなで、香典返しはしないと行って香典を受け取るようになると、経済的に苦しい生活をしている人は助かるかも知れない。

II. 共感と仏教

さらにお葬式を共感という言葉を中心に考えて見たい。

ペット葬というものがある。私はその依頼を受けたことがないのだが、飼い主の気持ちも分かるような気がする。現代社会は、人と人の分断が進み、人は孤立して暮らしている。その中でペットの果たす役割が大きいのも分かる。そのペットが死んだら、喪失感はかなり大きいと思う。私がペット葬をする自信が無いのは、死んだペットに共感を持ちにくいからである。

私は、かつて犬を飼っていた。その犬はまるで家族の中心であるかのような存在であった。そして、老衰で死んだ。その日は、忙しくて火葬場に運ぶことができなかったのもので、葬儀屋さんでドライアイスに分けてもらった。菊の花をつけてくれたので、ダンボール箱にドライアイスと菊の花をいれた。ペットを亡くす悲しさを覚えているが、その犬の死に共感することはなかった。

私が僧侶としてお葬式をつかさどるのは、第一に亡くなった方への共感である。どんな思いで生きてきた。どんな思いで息を引き取った。今、どんな思いだろうか。第二に遺族への

共感である。お葬式とは、死者への「とむらい」である。「とむらい」とは死者を中心とする葬儀であり、死者にたいする静かか会話である。

死者への共感とは、死に対する悲しみという感情が中心にあるように思う。愛する者の死は、まず何よりも悲しい。こうした、感情は続かない。愛する人を喪った悲しみに対して、「時が癒やしてくれる」と慰めの言葉を見聞きすることがある。そうした言葉掛けに同調はしないが、感情は時間の経過で薄らぐのも知っている。

このように感情は続かないが、明確な論理は続く。その例として、鎌倉時代の叡尊(えいぞん・1201-1290)の話をしたい。奈良の西大寺を中心として活躍した僧侶である。とくにハンセン病の患者の救済で有名だった。ハンセン病という診断が明確にできなかったのもので、死に至る病の患者を介助した。当時は、死を忌むべきことと考える人が多くいたようだ。死期の近い人間は無用の存在と考える人もいたかも知れない。だから、死がせまる人を叡尊の所に運んだ。叡尊の行動は、現代的に言えば看病、看取り、

葬儀であろう。死んでしまうと、人として意味をなさなくなったという考えに対して、叡尊は葬儀をおこなった。日本の仏教が葬儀に関わるようになったのは、叡尊からだといわれている。

こうした行動によって叡尊は人々から支持をうけ、鎌倉幕府からも高く評価された。鎌倉仏教の有名な祖師の一人は叡尊の受戒を批判する。これは叡尊に対するやっかみの気持ちであったかもしれない。また、叡尊の臨終が近くなった頃、西大寺の上空に紫雲がたなびいた。それを見て奈良の人々は叡尊を心配して続々とお寺に集まったという。その日の夕刻に叡尊は多くの弟子に見守られながら、息を引き取った。その死は、多くの僧侶や一般人に悼まれた。

ほぼ同じ時代を生きた親鸞(しんらん・1173-1263)は叡尊ほど多い人たちに看取られての臨終ではなかった。その葬儀も当時の京の庶民と同じようなものだった。当時の社会でほとんど無名といえる生涯だった。叡尊は抜群の有名な人だったし、親鸞は無名の存在であった。それが、今日、

叡尊は無名に近い存在であり、親鸞は鎌倉仏教を代表するかのよう語られる。

叡尊の行動は日本における対人援助の先駆者のようなものである。当時の社会からもそのような評価を受けていた。しかし、親鸞との違いはその思想・信仰にあったと思う。叡尊の信仰は多元的であったといわれる。言い換えれば迷いがある。伝統的な五性各別(ごしょうかくべつ・仏に向かう人間を区別分類していく思想)を受け入れたわけではないが、戒律を重視していた。したがって、受戒を大切にしていた。ここに戒を受ける人と受けない人の区別ができてくる。しかし、親鸞は人間に対して絶対的な平等感を示していた。こうした姿勢は、当時の仏教では特異な姿勢であった。

III.死とは、仏とは

ここで、死をどのように理解し、仏をどのように理解するのかを考えて見たい。死に対する共感という感情的な受け入れから、論理的な理解としたい。

死と仏について、「今の私」と「仏」を一直線に考えていただきたい。この一直線上に「死」がある。



上図で「今の私」の左側が過去で、右側が未来である。未来に「仏」がある。この仏は未来の私ではない。「私」を離れた、ただ仏である。そして、私と仏との間に死がある。釈尊は仏の右側に死があったわけだが、多くの方は、この二つの間に死がある。ここでいえることは、死は通過点であり、終着点ではない。

死が終着点であると考える人には、仏の存在を受け入れられない。「ほんとうに仏さまはいるの？」という問いになる。仏の存在に対する疑念は、存在ということに対しての理解が必要になる。仏教の論理では、存在は関係性の上に成り立つという。例えば、私が誰も知らない無人島に一人で暮らしていたとする。それは誰からも存在確認ができないのだから、存在しないのも同じことになる。また、私

がAさんと一緒に居たとするとき、私はAさんの存在を認識できるし、Aさんは私の存在を認識できる。他の時に、私はBさんと会ったとする。私はBさんの存在を認識できるし、Bさんも私の存在を認識できる。しかし、AさんとBさんはお互いに存在を認識することができない。そうすると二人はお互いに存在するかどうか分からない。そうすると普遍の実態のない私たちの存在は、何を普遍の実態とするのか。それを仏とするならば、仏に向き合うことで私の存在が意味あるものになる。

IV. 仏にお参りをする

私は、仏にお参りをすることで私が意味ある存在になる。先ほど私は仏を普遍の実態といった。他の表現として絶対的善といえる。

お参りをするというと、死者の成仏を願うと理解する人もいれば、死者の生前の思い出を語るという人もいる。しかし、お参りをする対象は仏であるから、仏に成仏を願うというはおかしなことだ。

先日、妻の母親の五十回忌だった。妻の母親のお墓は遠方のお寺にあった。五十回忌を済ませてから墓を撤去することにした。遠方であるため、お墓参りもできないので、お母さんのお骨を持って帰ることにした。帰ってから、お母さんのお骨を仏壇に置いた。すると、隣に一年前に亡くなった私の母親のお骨があった。二人はどんな挨拶を交わすのだろうと思った。心配しながら顔をあげた。すると、仏壇の奥に阿弥陀仏が立っていた。

そうだ、どちらの母親も挨拶を交わす必要はないのだ。どちらも極楽浄土という阿弥陀仏の世界で仏に成っているのだから、何も心配はいらない。

妻の母親が亡くなったのは、私も妻も中学生だった。その時、私は妻の存在も知らず、その母親の交通事故も知らなかった。しかし、お母さんが亡くなるときの思いに心を寄せることはできる。どんな思いで亡くなっていったかと想像をすることができる。ここに共感がある。この共感を普遍化するというのは、仏とし認識す

ることである。

仏とは絶対的善である。こんどはこの絶対的善に手を合わすのが、お参りである。お参りをするとどうなるか。それは絶対的善に向き合うと、自分の矮小さが見てくる。一方で、仏はどうしているのか。仏は、私を見つめているのだと思う。お母さんは妻を 50 年間ずっと見つめてきたのだ。

その眼差しはとってもやさしいものだと思う。ずっと見つめているということを、監視されているように受け取るべきではない。立派な人生をすごすことができないのは、仏の側からはすべて承知であろう。だからこそ、やさしく温かい眼差しを向けてくださる。その眼差しを受けながら生きるということは、とても意味ある人生だと思う。

V. まとめ

対人援助の基本は、共感だと思う。その共感を普遍化させるところに、仏教の働きがあるのだと思う。